様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１２６９

研究課題名（和文）日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究

研究課題名（英文）Research on how educational background factors derived from the native languages and cultures of Japanese language learners affect their reading and writing methods

研究代表者
村岡　貴子（MURAOKA, TAKAKO）

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：３０２４３７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本国内外の多様な母語・母文化的背景における大学の日本語読解・ライティング教育について、1) 教員や学生の読解・ライティング教育観といったビリーフ、2) 入試制度や卒業論文制度等、学習・教育を取り巻く種々の環境面、3)学生の学習プロセスの変容の観点から、各々質的・量的に、探索的な調査・分析を行った。その結果、各地域の入試や卒業論文の制度に加え、シラバスや学生・教員の文章観・文章教育観のビリーフ等の種々の要因が、読解・ライティン教育に影響を与えていること、および学生の長期的な学習変容のプロセスも明らかになった。これらの知見は、分野を超えた大学教育や研究指導に示唆を与えるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本・海外の多様な母語・母文化的背景における大学の日本語読解・ライティング教育について、教員や学習者のビリーフ、教育の環境、および学習プロセスについて、各々質的・量的に多様なアプローチを用いて検討した。その結果、各地域の入試や卒業論文の制度に加え、シラバスや教員のビリーフ等、種々の要因が読解・ライティン教育に影響を及ぼしていることがわかった。これらの知見は、留学によるモビリティや学習・教育環境の多様化が進む現在、地域を超えて教員が読解・ライティング教育の課題を共有し、その改善に向けた多面的な検討を行うために有用で、かつ教育連携の重要性を示唆した点に学術的・社会的意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：This study was a qualitative and quantitative exploratory investigation and analysis of Japanese reading and writing education at universities in Japan and abroad in a variety of native language and cultural settings. We investigated the following factors: 1) faculty and student beliefs about reading and writing education, 2) various environmental aspects related to surrounding learning and teaching, such as entrance examination systems and graduation thesis systems, and 3) transformations in students' learning processes. As a result, it became clear that various factors such as syllabi, students' and professors' beliefs about reading and writing education, and the entrance examination and thesis systems in each region affect reading and writing education, as well as the process of long-term learning and changes in students. These findings have implications for university education and research instruction across disciplines.

研究分野：日本語教育学

キーワード：教育文化的背景　ビリーフ　読解・ライティングの連携　論文スキーマ　シラバス　学習教育環境　学習プロセス　論理的思考

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

大学・大学院での学習・研究活動には文献講読や論文執筆が必須である。それらに対する学習観や教育観は、来日後に日本で日本語を用いて学ぶ留学生の場合、母国の入試制度や母語での言語教育の方法等から少なからぬ影響を受けている事例が散見される。このような事例は、日本における個々の授業実践で教員が経験的に把握しているが、当該教育の背景として重要であるものの、研究として広域で分析した例は見られない。大学教育で必須の読解・ライティング活動を、教育文化的背景の視点から捉え、学習・教育の改善に活用することは、学生・教員の双方に対して有意義である。本研究はこのような意義を認め、言語・地域横断的に探索的な研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、大学・大学院の日本語学習者による読解・ライティングの学習方法や文章観・文章教育観とその背景について、母語や出身地域での教育文化的背景を踏まえ、地域横断的な探索的調査から明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究は、初年度より 4 班（ビリーフ、学習教育環境、読解・ライティング連携、学習変容プロセス）に分かれて行った。1 年に 2 回程度、全体会議で各班の進捗状況と議論を共有した。

まず、海外の大学（アジア地域、欧州地域、南米地域の各一部）における学生と教員に対する「ビリーフ」調査では、両者へのアンケート調査票（日本語と現地語）による定量的分析、および教員へのインタビュー（オンライン）による定性的分析から、各々文章観、文章教育観を明らかにした。

次に、「学習教育環境」では、特にライティングの学習教育環境を把握するための調査の一環として、日本国内の大学学部における「文章表現法」等のレポート執筆能力の養成を目的とする科目のシラバスを分析した。関連して、「論理的思考力」をキーワードに議論を行った。

また、「読解ライティング連携」の調査では、中国とドイツを中心とした現地語の情報を含めた事情調査を行い、必要に応じて現地語から日本語への翻訳を行って資料とした。ドイツ関連では、中等教育機関のアビトゥア試験（卒業試験兼一般大学入学資格試験）のドイツ語科目の問題分析を行い、かつ、国内での関連教育機関での情報収集を行った。中国関連では、大学共通試験に当たる「高考」（普通高等学校招生全国統一考試）を分析し、また、中国の大学教員へのインタビュー調査を通して大学の読解・ライティング教育に関わるカリキュラムを分析した。

さらに、「学習変容プロセス」では、日本の大学の学部生への縦断的インタビュー調査により初年次教育から卒業論文執筆に至るまでの変容について定性的に分析を行った。また、オンラインによるピア・レスポンス活動について分析した。

以下では、各班につき主要な成果を報告する。

４．研究の成果

(1) ビリーフ班

まず予備調査（文献 1, 2）の知見をもとに、アジアの漢字圏・非漢字圏における大学の日本語専攻に在籍する学習者と教師に対して調査を行った。中国では 10 大学で学生・教員を合わせて 700 程度、韓国（7 大学 8 学部）、タイ（5 大学）、ベトナム（5 大学）についても各々250-400 程度のデータが収集された。欧州・南米地域についてはデータ量がアジア圏ほど多くなく、成果は

非漢字圏としてまとめ別稿に譲りたい。以下には文献 3-6 をもとに主要な成果を示す。

日本語専攻の学生と教員に対する定量的調査では、データを因子分析にかけたところ、中国の大学においては、教員は学生より因子数が多くライティング教育を多面的に捉えていた（なお、他のアジア圏のデータ分析も準備中である）（文献 3)。中国の大学では、日本語での卒業論文執筆が課されているため、入門からの初級レベルの読解・ライティングと、超上級レベルと言える卒業論文執筆に必要な読解・ライティングを円滑に接続させる必要があるが、カリキュラムや研究指導上、課題がある現状が明らかとなった（文献 4,5)。インタビューを行った日本語専攻の教員は、論文に必須の論理性や独創性等の特徴を重視し、その指導の困難さも指摘していた（文献 4,5)。卒業論文を課さない他国の大学の事例も少なくなく、中国の大学の場合には、かなり事情が異なり、極めて高度な読解・ライティング能力が必要とされることが推測された。さらに、来日後の留学生に対する専門日本語教育の観点から、分野横断的な関連教育との連携の重要性も示した（文献 6)。

(2)学習教育環境班

日本国内の大学に在籍する留学生を取り巻く日本語ライティングの学習教育環境調査の一環として、ライティング関連授業のシラバス分析を行った。共通教育科目（日本語 L1）と日本語教育科目（日本語 L2）におけるライティング関連科目のシラバスの分析を行い、シラバスの「概要・目標」では「論理的思考力」に言及する科目が多く、日本の大学においては学部生のライティングと論理的思考力を不可分の関係にあるとの共通認識があるという示唆を得た一方、「授業内容」欄では「論理的思考力」への直接的記述の割合が少ないという特徴もあることを明らかにした（文献 7, 8)。また、日本の大学に入学する理工系留学生に求められる論理的思考力の事例として、特に数式と論理記号を扱いながら論証する数学の場合を取り上げ、数学の研究者とともに議論し、俯瞰的には、文系か理系かの違いによらず、言語の問題として捉える重要性を指摘した（文献 9）。

さらに、ドイツ語圏の言語教育事情調査として、横浜市にある東京横浜独逸学園（Deutsche Schule Tokyo Yokohama）の現地調査・同校教員へのインタビューを行った。授業見学も含む現地調査から、ドイツのカリキュラムでは、論理的な文章を書くことに対してドイツ語授業の中で多くの時間が費やされ、言語能力に加え、社会的能力、協働能力、批判的思考能力、民主的市民性なども含めた資質・能力（コンピテンシー）の促進が目指されていることがわかった。

加えて、こうした全人的教育を行うことのできる教員を養成・研修していくことは、語種を超えた喫緊の課題であること、またそのためにはさまざまな言語教育研究者間の協力や共同研究が必要であることが明らかになった（文献 10)

(3)読解・ライティング連携班

中国とドイツの例を取り上げた。まず、中国国内の作文を担当した 7 名へのインタビューを行った結果、読解との連携はあまり見られなかったが、新しい『教学指南』『教学大綱』の公表との関連で「学術写作」とライティング授業と卒業論文との関連を論じた（文献 11)。次に、ドイツの中等教育機関のアビトゥア試験（NRW 州の英語・ドイツ語）を分析した結果、どちらの科目も、試験問題を読み込み、具体的な根拠を示し、問いに対して論述することが求められていた。英語科目の「言語仲介」問題では、生徒にとって真正性の高い異文化の問題設定がなされ、いかにコミュニケーションするのかが問われていた。ドイツ語科目においては、試験問題の文章の「分析」や「比較」により長編の「評論」作成が期待されていることがわかり、日本の教育への示唆を得た（文献 12)。

(4)学習変容プロセス班

まず、学士課程4年間のライティングを通じた学びについてインタビューを行い、その変容プロセスを質的に明らかにした（文献13)。また、大学の初年次教育における文章表現科目とその設計（文献 14）やオンライン授業でのピア・レスポンス活動についても実践的な視点から議論を行った（文献15)。

さらに、本研究に関連する教育アンケートやシラバス調査結果の言語分析をより有効にするため、新しい自然言語処理手法(Sudachi.rs および spaCY_GSDLUW)の活用法を調査した。また、研究場所に依存しないデータ処理環境の構築を目指し、クラウドシステムである Microsoft Azure システムの研究利用法について、調査及び活用実践した。

(5)各班の連携による発信

文献16-22の通り、本研究に通底する俯瞰的なテーマを設定し、狭義の言語能力育成を超えた読解・ライティング能力の養成を捉える視点を提示しつつ、大学教育における読解・ライティング教育について、教育文化的背景を踏まえた種々の議論を発信した。

〈引用文献〉

(1)中島祥子・村岡貴子（2021)「ライティング教育に関するビリーフ調査に向けての基礎的調査 －韓国の大学の事例をもとに－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第25号，pp.63-73

(2)村岡貴子・中島祥子（2021)「日本語日母語話者教員による日本語読解・ライティング教育に関する期待と課題 －漢字圏と非漢字圏の各地域における大学教員への調査から－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第25号，pp.85-94

(3)阿部新・中島祥子・村岡貴子（2022)「中国の大学における日本語専攻の学生と教員が抱くライティング学習と教育に関するビリーフ －学生と教員の違いを中心に－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第26号，pp.73-84

(4)村岡貴子・阿部新・中島祥子（2023)「中国の大学の中国人日本語専攻教員が持つ卒業論文指導に関わる文章教育観 －重点大学の教員9名へのインタビュー調査から－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第27号，pp.103-113

(5)中島祥子・村岡貴子・阿部新（2023)「中国の大学でライティング教育を行う日本語母語話者教員のビリーフ －4名の教員へのインタビュー調査から－」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第27号，pp.115-125

(6)村岡貴子(2023)「留学生の研究活動を支える専門日本語教育（第1部第1章)」村岡貴子編著『大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて』ココ出版,pp.3-18

(7)池田隆介「ライティングとプロフィシェンシー」『フォーラム「日本語プロフィシェンシー研究の広がり」-いま、そして、これから』(主催：JALP記念論集編集委員会，後援：ひつじ書房），日本語プロフィシェンシー研究学会（2022.10.22 オンライン開催）

(8)池田隆介・山路奈保子（2022)「学部留学生を対象とする日本語ライティング科目関連シラバスの特徴」『日本語教育学会2022年度九州・沖縄支部集会』(2022.7.2 筑紫女学園大学)

(9)太田亨・菊池和徳（2023)「理工系留学生に求められる日本語による論理的思考力（第2部第8章)」太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美編『日本で学ぶ理工系留学生　教育・研究・留学生活』ココ出版，pp.139-155

(10)太田達也「Deutsche Schule のドイツ語授業において目標とされるコンピテンシー ―民主主義をテーマとした論述文の読解・作文の授業見学報告」日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第55号（掲載決定）

(11)石黒圭・王慧雋（2023)「中国国内の大学の日本語専攻におけるアカデミック・ライティン

グ教育の現状と課題 -現地教師へのインタビューをもとに-」専門日本語教育学会第 25 回研究討論会（2023.3.4　長崎県建設総合会館 8 階大会議室）
(12)脇田里子・鎌田美千子（2022)「ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析 －日本語のアカデミック・ライティングへの示唆－『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第 14 号，pp.26-34
(13)大島弥生（2021)「理系中国人留学生による学士課程でのライティングを通じた学びのふりかえり」『専門日本語教育研究』第 23 号，pp.3-10
(14)大島弥生（2022)「初年次必修文章表現科目の成果と課題－授業設計者のための材料として－（第 1 部第 1 章)」井下千以子編著『思考を鍛えるライティング教育－書く・読む・対話する・探究する力を育む』慶應義塾大学出版会，pp.15-32
(15)大島弥生・石塚健（2022)「中韓留学生の日本語レポート作成科目におけるオンラインでのピア・レスポンス活動」『立命館アジア・日本研究学術年報』第 3 号，pp.74-93
(16)村岡貴子・鎌田美千子・中島祥子・石黒圭・堀一成（2019)「大学における日本語ライティング教育の課題と可能性 －言語スキル養成からライティング支援人材の育成までー」日本語教育学会春季大会パネルセッション（2019.11.23 つくば国際会議場）
(17)村岡貴子・阿部新・脇田里子・池田隆介・大島弥生（2022)「学習者と教員の背景要因がアカデミックな日本語教育に及ぼす影響 －ビリーフ・学習プロセス・学習環境の観点から狭義の言語能力育成を超えてー」日本語教育学会秋季大会パネルセッション（2022.11.26 オンライン開催）
(18)大島弥生（2022)「はじめて論文に取り組む留学生や大学生に向けた論文読解・作成入門の試み」『G-Navi シンポジウム/第 41 回神戸大学国際教育総合センターコロキアム』(招待講演）（2022.2.22 オンライン開催）
(19)村岡貴子（2022)「大学での学習・研究活動に必要なアカデミック・ライティング教育の可能性と課題」『G-Navi シンポジウム/第 41 回神戸大学国際教育総合センターコロキアム』（基調講演）（2022.2.22 オンライン開催）
(20)村岡貴子（2023)「趣旨説明と報告」『第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な 日本語ライティング教育実践の諸相 報告書』大阪大学国際教育交流センター，pp.3-15 【報告書】第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会_20230310.pdf（osaka-u.ac.jp）（2023.2.15 大阪大学コンベンションセンター）
(21)大島弥生（2023)「論文の読解から作成に向けて気づきを促す -留学生・大学生のための練習と教材化のアイデアー」『第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な 日本語ライティング教育実践の諸相 報告書』大阪大学国際教育交流センター，【報告書】第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会_20230310.pdf（osaka-u.ac.jp）pp.16-73（2023.2.15 大阪大学コンベンションセンター）
(22) 堀一成（2023)「科学分野を主とする高校から大学院まで一貫した日本語ライティング教育」『第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な 日本語ライティング教育実践の諸相 報告書』大阪大学国際教育交流センター，【報告書】第 15 回大阪大学専門日本語教育研究協議会_20230310.pdf（osaka-u.ac.jp）pp.91-130（2023.2.15 大阪大学コンベンションセンター）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 阿部新・中島祥子・村岡貴子	４．巻 26
２．論文標題 中国の大学における日本語専攻の学生と教員が抱くライティング学習と教育に関するビリーフ －学生と教員の違いを中心に－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流	６．最初と最後の頁 73,84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/86450	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 脇田里子	４．巻 13
２．論文標題 ドイツのアビトゥア試験英語科目における「言語仲介」問題分析 －日本語教育での「言語仲介」導入のために－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	６．最初と最後の頁 45,63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大島弥生	４．巻 23
２．論文標題 理系中国人留学生による学士課程でのライティングを通じた学びのふりかえり	５．発行年 2021年
３．雑誌名 専門日本語教育研究	６．最初と最後の頁 3,10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 太田達也	４．巻 53
２．論文標題 市民性形成を視野に入れたドイツ語教育	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』	６．最初と最後の頁 55,59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田達也	4．巻 62
2．論文標題 職業的アイデンティティの発達を支援するドイツ語教員養成・研修	5．発行年 2022年
3．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学	6．最初と最後の頁 49,65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浅井達哉・横野光・柳瀬隆史・岩崎拓也・井上雄太・田中啓行・石黒圭	4．巻 22
2．論文標題 クラウドソーシングの言語表現 ： ビジネス日本語研究におけるAI技術の活用	5．発行年 2020年
3．雑誌名 専門日本語教育研究	6．最初と最後の頁 9,16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中島 祥子・村岡 貴子	4．巻 25
2．論文標題 ライティング教育に関するビリーフ調査に向けての基礎的調査 ： 韓国の大学の事例をもとに	5．発行年 2021年
3．雑誌名 多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集	6．最初と最後の頁 63～73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村岡 貴子・中島 祥子	4．巻 25
2．論文標題 日本語非母語話者教員による日本語読解・ライティング教育に関する期待と課題 ： 漢字圏と非漢字圏の各地域における大学教員への調査から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集	6．最初と最後の頁 85,94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79106	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村岡貴子・阿部新・中島祥子	4．巻 27
2．論文標題 中国の大学の中国人日本語専攻教員が持つ卒業論文指導に関わる文章教育観 -重点大学の教員9名へのインタビュー調査から-	5．発行年 2023年
3．雑誌名 大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流	6．最初と最後の頁 103,113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90850	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中島 祥子・村岡 貴子・阿部 新	4．巻 27
2．論文標題 中国の大学でライティング教育を行う日本語母語話者教員のビリーフ -4 名の教員へのインタビュー調査から-	5．発行年 2023年
3．雑誌名 多文化社会と留学生交流　大阪大学国際教育交流センター研究論集	6．最初と最後の頁 115,125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90851	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 脇田里子・鎌田美千子	4．巻 14
2．論文標題 ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析-日本語のアカデミック・ライティングへの示唆-	5．発行年 2022年
3．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6．最初と最後の頁 26,34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大島弥生・石塚健	4．巻 3
2．論文標題 中韓留学生の日本語レポート作成科目におけるオンラインでのピア・レスポンス活動	5．発行年 2022年
3．雑誌名 立命館アジア・日本研究学術年報	6．最初と最後の頁 74,93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34389/ritsumeikanasiajapan.3.0_74	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新實葉子・中嶌容子・松本理美・大島弥生	4．巻 24
2．論文標題 経営分野の論文における「となっている」の用法と談話機能の分析―論文の読解および作成の支援を目指して―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 専門日本語教育研究	6．最初と最後の頁 59,66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　13件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 村岡貴子
2．発表標題 日本語アカデミック・ライティング教育の目指すべき方向性 －実践および教員への調査から－
3．学会等名 李在鎬教授 科研勉強会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 阿部新・中島祥子・村岡貴子
2．発表標題 中国の大学における日本語専攻の学生と教員が抱くライティング学習と教育に関するビリーフ －学生と教員の違いを中心に－
3．学会等名 日本語教育学会秋季大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 池田隆介
2．発表標題 日本の大学におけるライティング関連科目シラバスの特徴―大学は「ライティング」に何を期待しているか―
3．学会等名 日本語プロフィシエンシー研究学会10周年記念シンポジウム，JALP
4．発表年 2021年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 大学での学習・研究活動に必要なアカデミック・ライティング教育の可能性と課題
３．学会等名 G-Navi シンポジウム/第41回神戸大学国際教育総合センターコロキアム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大島弥生
２．発表標題 はじめて論文に取り組む留学生や大学生に向けた論文読解・作成入門の試み
３．学会等名 G-Navi シンポジウム/第41回神戸大学国際教育総合センターコロキアム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 太田亨
２．発表標題 「日本語で学ぶ論理」が目指す「論理」の教育実践
３．学会等名 金沢大学における日本語教育の研究・教育・実践（金沢大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 脇田里子・鎌田美千子
２．発表標題 ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析 －日本語のアカデミック・ライティングへの示唆－
３．学会等名 第55回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、オンライン開催
４．発表年 2022年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 研究のデザインから論文完成に至るまでに必要な研究倫理の諸相
３．学会等名 昭和女子大学研究倫理教育講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 大島弥生
２．発表標題 学習者自身がふりかえる大学学士課程でのライティングを通じた学び　―留学生・日本語母語話者大学生へのインタビューをもとに―
３．学会等名 日本語教育学会2020年度春季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 太田達也
２．発表標題 オンライン授業における「仲介」スキルと民主的市民性の促進
３．学会等名 JaF-DaFフォーラム（オンライン開催）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 脇田里子
２．発表標題 ドイツのギムナジウムの外国語教育における言語調整の意味するもの
３．学会等名 オンライン　京都大学
４．発表年 2021年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 論文スキーマ形成を促す日本語ライティングの学習と教育 ―学生・教員の事例をリソースとして―
３．学会等名 東京大学文学部日本語教育研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 村岡貴子・鎌田美千子・中島祥子・石黒圭・堀一成
２．発表標題 大学における日本語ライティング教育の課題と可能性 ―言語スキル養成からライティング支援人材の育成まで―
３．学会等名 日本語教育学会春季大会パネルセッション（つくば国際会議場）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村岡貴子・阿部新・脇田里子・池田隆介・大島弥生
２．発表標題 学習者と教員の背景要因がアカデミックな日本語教育に及ぼす影響-ビリーフ・学習プロセス・学習環境の観点から狭義の言語能力育成を超えて-(パネルセッション)
３．学会等名 日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 研究活動に必要な書記言語コミュニケーションの世界-研究のデザインから日本語による学術論文公開まで-
３．学会等名 カセサート大学人文学部大学院オンライン特別講義（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 大学での学習・研究活動に必要な書記言語コミュニケーションの世界-アカデミック・ライティングの実践と教育のために-
３．学会等名 華南師範大学国家一流学科建設(日語考査)教学検討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 池田隆介・山路奈保子
２．発表標題 学部留学生を対象とする日本語ライティング関連科目シラバスの特徴
３．学会等名 日本語教育学会2022年度九州・沖縄支部集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 池田隆介
２．発表標題 引用の誤りに関する一考察 ―留学生の教養教育科目レポートを題材に―
３．学会等名 九州日本語プロフィシェンシー研究会2022年度第1回研究例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 池田隆介
２．発表標題 ライティングとプロフィシェンシー
３．学会等名 フォーラム「日本語プロフィシェンシー研究の広がり」フォーラム「日本語プロフィシェンシー研究の広がり」-いま、そして、これから』(主催:JALP記念論集編集委員会，後援:ひつじ書房)
４．発表年 2022年

１．発表者名 太田達也・鈴木友美加
２．発表標題 DaFをめぐる誤解とDaF研究の近年の動向
３．学会等名 日本独文学会東海支部2022年夏季研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tatsuya Ohta
２．発表標題 Podium Plus: Germanistik und Deutschlehrer*innenausbildung weltweit. Schnittstellen, Kooperationsformate und das Potential von digitalen Elementen (DAAD)
３．学会等名 17. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer 2022 Wien ウイーン大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 太田達也
２．発表標題 これからのドイツ語教師に求められるもの -教職課程ドイツ語科指導法科目の現状と課題-
３．学会等名 Goethe-InstitutTokyo主催、専門家会議「ドイツ語教育の未来を拓く - 持続可能なドイツ語教育に向けて 慶應義塾大学（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tatsuya Ohta
２．発表標題 Welche Kompetenzen werden von DaF-Lehrenden an Hochschulen ausserhalb des deutschsprachigen Raums heute und in Zukunft erwartet?
３．学会等名 Goethe-Institut主催「GETVIC024」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tatsuya Ohta
２．発表標題 Deutschlehrendenaus- und -fortbildung in Japan und Potenziale der Kooperation mit Nachbarlaendern
３．学会等名 Internationalization of teacher education for German as Foreign/Second Language ソウル国立大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 村岡貴子
２．発表標題 趣旨説明と報告
３．学会等名 第15回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な日本語ライティング教育実践の諸相
４．発表年 2023年

１．発表者名 石黒圭・王慧雋
２．発表標題 中国国内の大学の日本語専攻におけるアカデミック・ライティング教育の現状と課題―現地教師へのインタビューをもとに―
３．学会等名 専門日本語教育学会第25回研究討論会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大島弥生
２．発表標題 論文の読解から作成に向けて気づきを促す-留学生・大学生のための練習と教材化のアイデア-
３．学会等名 第15回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な 日本語ライティング教育実践の諸相（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 堀一成
２．発表標題 科学分野を主とする高校から大学院まで一貫した日本語ライティング教育
３．学会等名 第15回大阪大学専門日本語教育研究協議会 学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な 日本語ライティング教育実践の諸相（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計17件

１．著者名 Tatsuya Ohta, Kazumi Sakai, Manuela Sato-Prinz, Tomoko Maruyama	４．発行年 2021年
２．出版社 International Symposium on Foreign Language Teaching and Learning Research.	５．総ページ数 175
３．書名 “Introduction”. In: Goethe-Institut Tokyo (ed.): What are the benefits of learning multiple languages?	

１．著者名 Tatsuya Ohta	４．発行年 2021年
２．出版社 外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム	５．総ページ数 175
３．書名 ワークショップのまとめと全体会（２日目）「多言語教育の意義とは？」	

１．著者名 村岡貴子	４．発行年 2022年
２．出版社 神戸大学国際教育総合センター	５．総ページ数 57
３．書名 「大学での学習・研究活動に必要なアカデミック・ライティング教育の可能性と課題」『G-Naviシンポジウム／第41回神戸大学国際教育総合センターコロキアム『留学生に対するアカデミックライティング教育・支援の現状と課題』実施報告書・資料集』	

1．著者名 大島弥生	4．発行年 2022年
2．出版社 神戸大学国際教育総合センター	5．総ページ数 57
3．書名 「初めて論文に取り組む留学生や大学生に向けた論文読解・作成入門の試み」『G-Naviシンポジウム／第41回神戸大学国際教育総合センターコロキアム『留学生に対するアカデミックライティング教育・支援の現状と課題』実施報告書・資料集』	

1．著者名 池田隆介（松村瑞子・山崎和夫・因京子編）	4．発行年 2020年
2．出版社 朝日出版社	5．総ページ数 499
3．書名 「ルーブリック自作がレポート執筆に関する学習者の意識に及ぼす影響」『語用論研究の可能性』	

1．著者名 池田隆介	4．発行年 2019年
2．出版社 花書院	5．総ページ数 301
3．書名 ルーブリック式レポート評価表への日本人学生の印象―自由記述式アンケートの分析をもとに―．『言語の研究―言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座―』pp.1-14	

1．著者名 石黒圭	4．発行年 2020年
2．出版社 光文社新書	5．総ページ数 264
3．書名 段落論 ー日本語の「わかりやすさ」の決め手ー	

1．著者名 石黒圭（石黒圭・烏日哲編著）	4．発行年 2020年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 292
3．書名 「ピア・レスポンスの授業設計　学習者はどうすれば研究力が身につくのか」（第1章）『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか：学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学 』pp.1-25	

1．著者名 村岡貴子（石黒圭・烏日哲編著）	4．発行年 2020年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 292
3．書名 「論文作成における文献引用法の改善　学習者は先行研究の引用法をどのように学ぶのか」（第4章）『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか：学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学 』pp.73-96	

1．著者名 石黒圭（野田尚史編）	4．発行年 2020年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 284
3．書名 「授業活動として行う日本語学習者の読解」（第12章）『日本語教育学研究8 日本語学習者の読解過程』pp.225-244	

1．著者名 村岡貴子（野田尚史編）	4．発行年 2020年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 284
3．書名 「論文執筆を目的とした日本語学習者の読解」（第13章）『日本語教育学研究8 日本語学習者の読解過程』pp.245-263	

1．著者名 福田倫子・小林明子・奥野由紀子編著 阿部新・岩﨑典子・向山陽子著 阿部新	4．発行年 2022年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 180
3．書名 「第4章 ビリーフ」『第二言語学習の心理 ： 個人差研究からのアプローチ』	

1．著者名 井下千以子編著 大島弥生	4．発行年 2023年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 298
3．書名 「初年次必修文章表現科目の成果と課題-授業設計者のための材料として―」(第1部第1章)『思考を鍛 えるライティング教育-書く・読む・対話する・探究する力を育む』	

1．著者名 鎌田修・由井紀久子・池田隆介編 池田隆介・山路奈保子	4．発行年 2022年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 480
3．書名 「ライティング関連科目のシラバスの特徴―「概要・目標」と「授業内容」の記述内容の対比」『日本語プロフィシェンシー研究の広がり』	

1．著者名 村岡貴子編著 村岡貴子	4．発行年 2023年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 277
3．書名 「留学生の研究活動を支える専門日本語教育」(第1部第1章)『留学生への研究支援と日本語教育』	

１．著者名 太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美 編著　太田亨	４．発行年 2023年
２．出版社 ココ出版	５．総ページ数 317
３．書名 理工系留学生に求められる日本語による論理的思考力」(第3部第8章)『日本で学ぶ理工系留学生：教育・研 究・留学生活』	

１．著者名 太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美 編著 村岡貴子	４．発行年 2023年
２．出版社 ココ出版	５．総ページ数 317
３．書名 「理工系留学生に必要な日本語ライティング力」(第3部第10章)『日本で学ぶ理工系留学生：教育・研究・留学生活』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阿部　新 (ABE SHIN) (00526270)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	中島　祥子 (NAKAJIMA SACHIKO) (80223147)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
研究分担者	池田　隆介 (IKEDA RYUSUKE) (60347672)	北九州市立大学・基盤教育センター・教授 (27101)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山路　奈保子 (YAMAJI NAOKO) (40588703)	九州工業大学・教養教育院・教授 (17104)	
研究分担者	太田　達也 (OHTA TATSUYA) (50317286)	南山大学・外国語学部・教授 (33917)	
研究分担者	太田　亨 (OHTA AKIRA) (40303317)	金沢大学・国際機構・教授 (13301)	
研究分担者	脇田　里子 (WAKITA RIKO) (20251978)	同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授 (34310)	
研究分担者	石黒　圭 (ISHIGURO KEI) (40313449)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授 (62618)	
研究分担者	鎌田　美千子 (KAMADA MICHIKO) (40372346)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	大島　弥生 (OSHIMA YAYOI) (90293092)	立命館大学・経営学部・教授 (34315)	
研究分担者	堀　一成 (HORI KAZUNARI) (80270346)	大阪大学・全学教育推進機構・准教授 (14401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	華南師範大学	中山大学		
タイ	カセサート大学	タマサート大学		
メキシコ	グアダラハラ大学			
韓国	江陵原州大学	韓国外国語大学		